

感じる力を磨く授業の挑戦～武蔵野大学ウェルビーイング学部ウェルビーイング学科「自然・環境入門」～

山田 博（武蔵野大学 ウェルビーイング学部 教授）

菅原 育子（武蔵野大学 ウェルビーイング学部 教授）

要約

本稿は、武蔵野大学ウェルビーイング学部ウェルビーイング学科の1年時必修授業である「自然・環境入門A」という実習授業について、その内容、受講した学生の体験、それを通じて学生たちが感じたこととその変化についてまとめたものである。畑で野菜を育てる体験や、公園でのシェアリングネイチャーの体験から成る本授業の目的と狙いを示す。体験をとおして感じたことをありのままに言語化し、教員や学生と共有することを繰り返す授業構成のなかで、学生たちがどのように感じ、それをどのように言語で表現したかを学生のコメントやレポートから抽出する。自然の営みに直接触れる体験を1学期間継続的にすることで、人間が自然とのつながりの中で生かされているということ、地球という生態系の一員であることを心身で深く実感すること、という当初の目的が実現したか、今後にむけた課題について考察する。

1. はじめに

武蔵野大学ウェルビーイング学部ウェルビーイング学科は、これから未来がウェルビーイングであることを願い、それを実現するウェルビーイング・デザイナー、すなわちウェルビーイングな世の中をどうすれば実現できるのかを考え、形にできる人財を輩出するための学びの場を作るために2024年4月に設置された。初代学部長である前野隆司は、その教育の根幹として、第1に仏教的ウェルビーイング学、第2に科学的ウェルビーイング学の二つの柱を持ちそれら両者を理解実践すること、そのうえに第3の柱である創造的イノベーションを実践すること、それらに加えて4本目の柱として、人間中心主義を超え、全体性、無分別性を取り戻すための感性の陶冶、という4つの柱を設定している（前野, 2024）。

筆者らが担当している「自然・環境入門A」は、ウェルビーイング学科の1年生が1, 2学期に受講する必修の授業であるが、本稿では、この授業の内容、受講した学生の授業をとおした体験、それを通じて学生たちが感じたことと変化についてまとめる。内容と体験については、授業計画の背景にある考え方も交えて記し、学生の変化については毎回の授業コメントおよび最終レポートからの引用を行い考察する。

2. 「教えない授業」とその目的

本授業をどのようなものとするかについては、学部開設前の1年をかけて教員予定者の皆で話し合いを重ねながら形にしてきた。

その中で大きな方針は2つあった。それは1つ目はなるべく「教えない」、2つ目は体験を重視する、であった。本学が目指す教育の在りかたである「響学スパイラル」においても、ただ知識を受け取るだけではなく、学生も教職員も自ら問い合わせ、考え、行動し、カタチにして、見つめなおす、という主体的で体験を重視する学びの方針が示されている¹⁾。筆者（山田）もかねてより社会人との学びの場をつくる際に、一方向に教え込むのではなく体験を中心とした方が後々本人にとって真に役立つものになるという経験と実感を持ってきた。一方で、従来の大学の授業の印象は、教室の前にいる先生が滔々と語り、学生は聞く、あるいは中には居眠りや内職、おしゃべりに高じる者もいる、というのが自らの経験でもあった。「教えない授業」が学生にどう響くのかは未知数のスタートであった。シラバスには、次のようにこの授業の目的や主旨を記した²⁾。

「畠や公園での実習体験と、そこで感じたこと、得られた気づき、発見を対話によって振り返ることが中心です。ねらいは自然の営みに直接触れる体験を継続的にすることで、私たち人間が自然とのつながりの中で生かされているということ、地球という生態系の一員であることを心身で深く実感することです。それは身体、心、社会の Well-Being を支える土台、基礎体力を養成することになります。

畠では、大地の力で野菜を育てる活動を継続的に行い、季節や気候、作物の変化に触れ続けます。また感じたこと、気づき、発見を振り返ることで、

自然は思うようにコントロールできないこと、生命は循環し無駄なものが存在しないことなどの体験的な洞察を深めます。公園では、シェアリングネイチャーのアクティビティを行います。普段使っていない五感をフルに活用することで、感じる力（感性）を呼び起こしていきます。振り返りや日常での実践を続けることで、人間という生物として本来備わっている本能的な感性を呼び戻し、様々な事象の中に目には見えていないつながり合い、関連性が常に存在しており、その関係性の網の中で私たちが相互に関連しながら変化し存在していることを実感していきます。」（2024年度自然・環境入門A シラバスより抜粋）

この目的と主旨が、ウェルビーイング・デザイナーを目指す本学部の学生们がこの先学び、社会に出て活躍していく時に、彼らを支え、力を与えるものになってくれることを願っている。

3. 授業の内容と学生の反応

（1）最初の授業

自然・環境入門Aは月曜日の午後、3、4限の連続開講である。必修授業のため、90名の1期生が大学に入学し初めて受ける学部の授業となった。最初の授業で学生に伝えたのは、授業目的と、授業で大切にすること、の2点であった。

授業の目的は、「自然に触れて、感じる力を磨き、自然から学ぶ」。

これはシラバスに書いた主旨の骨子をキャッチフレーズ的に短く表現したものである。これ以降の授業でも「この授業の目的はなんだっけ？」と何度も問い合わせたことで、彼らの会話やレポートの中にもこの文言が散見されるようになっていた。

学ぶうえで大切なことは、「体験する、観察する、ゆっくり、感じる、問い合わせを持つ、振り返る」。

これは、活動を行う際に心がけておくと体験が深まるコツと考えていることである。多くの人と森での体験をする中で実践的に効果を実感したことをもとにしている（山田, 2018）。それらに、問い合わせを持つ、振り返る、の2つを加えた。これら2つを加えた意図は先述の「響学スパイラル」にもあるように、学生の

体験がただやっただけで流れてしまわないよう、学生の中に深く留まるものになるようにという工夫である。

学生たちは、この2つをきいた後、22のグループになり、学外に借りた畠へ出かけた。長年この土地で農家をされてきた地主さんから大学がお借りした約350m²の農地である。見事に手入れがなされ草が一本も生えていない土だけの畠。約3m²の区画を22班分あらかじめ区切って目印だけをつけておいた。

そこで学生が行ったのは、約1時間、ただ「土を感じること」であった。学生たちの戸惑いが手に取るように伝わってきた。土に触るのは幼稚園の頃以来という人が大半、中には田舎の祖父母の畠を手伝ったことがある人もいたが、何しろ大学に入って初めての授業が畠に行って土を観察し、感じことなのである。どうしていいかわからないのも無理はない。教員側も未知の取り組みであった。しかし、この日の授業のコメントには我々の想像をはるかに超えた体験と感想が綴られていた。なお、コメントの書き方についても、一つだけ注文をつけた。それは、書く前に構成を考えたり、書いたあと綺麗にまとめたりせず、ただ感じた言葉をそのまま書いて欲しい、結論もなくていいので浮かんだままに書くこと、であった。これは一見、大学で学ぶ「レポートの書き方」に真っ向から反するようであるが、まずは感じたことを言語化し、それを見つめることで「自分の中におきたこと」を観察する、というプロセスを重視したためである。

以下にいくつかの印象的なコメントを紹介する。

「正直この授業の内容を見た時は、自然を体で感じるという事に全く想像もできませんでしたが、実際畠に行って、自然を体で感じることを意識しながら土を観察するだけでも沢山体で感じることが出来ました。感じたことだけでなく、土に対して初めて出てきた感情もあり、自分自身とても驚いています。」

「土に対するイメージはベタベタ、ドロドロ。しかし、本当に踏み込んだ瞬間だいぶ違った。言葉には説明しにくいけど、冷たかった！土はとても

繊細で柔らかい。」

「今まで踏んできた土の感触ではなく、ザクっとした感触の踏み心地に変化した。まるで霜柱を踏んでいるかのような感覚に胸が躍り、辺りの硬い土を踏みまくった。踏んでいる最中、胸がスカッとするような爽快感を味わった。」

「土の中をよく見てみると、アリなどの小さい昆虫を見つけることができて、こういう自然是色々な生き物とともに使われるべきものであると感じて、今世界で起こっている生き物の生息地を含む森林破壊など、SDGs的な問題が頭に浮かびました。」

「自然というのは子供全員の実家のようなものである。大体の子供は外で遊んだりして自然と調和してきた。そしてそれを拠り所としていた人間も多いだろう。その感覚を今日でも取り戻せ、安心感を感じられた。」

どうだろうか。感じ方が実に多様である。そして型にはまった表現ではなく、それぞれの選んだ言葉がユニークである。そして、子どもの頃に感じていたことはずっと彼ら、彼らの中に存在していて、それが今回土に触れゆっくり観察したこと、乾いた土の中に眠っていた種が水を得て芽吹くように、その心の中で目を覚ましたようにも思えた。

中には感じたことを少し発展させて自分に引き寄せた思索をする学生もいた。例えば

「いろんな要素が繋がっているのを感じました。そしてこれは、私たちにも言えるのではないかと思います。多種多様な人と関わりあって、自分が形成されていく。なんか似ている気がします。」

といったように。

(2) 野菜を育てる

2週目の授業までに、学生たちはグループごとに育てたい野菜を自分たちで相談して決め、一緒に園芸店に行き購入し、畑で種まきや苗の定植を行った。自主的に野菜を本物の畑で育てるのは人生で初めてだという学生がほとんどで、何種類、どのくらい植えたらいいのか、手探りである。野菜同士の相性を調べたグループ、とにかく食べたいものを植えよう、というグループなど、これまた学生たちの個性が表れた。

2、4、7週目の授業および授業のない日もあわせて、学生らは自分たちの畑で自分たちなりに野菜の世話をした。その度に観察し、感じ、想定外のことに驚き、予想外の成長に喜び合いながら1学期が進んでいった。土や野菜に触れあうにつれて、彼らの中に野菜への愛情が芽生え、地主さんへの感謝が育ち、仲間と試行錯誤して作業し合うことで失敗さえも楽しむ姿勢、そして自分自身への気づきが深まっているのが毎週のコメントから読み取れた。

これらの変化を、前野が提唱する幸せの4因子（前野, 2013）に照らし合わせてみると、それは「やってみよう」（とにかく野菜を育てよう）、「ありがとう」（地主さんのおかげで活動できている）、「なんとかなる」（仲間がいるから失敗も楽しい）、「自分らしく」（自分たちの畑が最高！）の4つである。これらは人がウェルビーイングであることにつながる要素と考えられることから、この授業を通じて学生たちのウェルビーイングも向上したという仮説がたてられる。残念ながら今年はそれに関するデータは取っていなかったため、来年度以降、そのような研究もしていきたい。

この時期の学生コメントもいくつか紹介する。

「まだ完全に実っていない枝豆を見ていると、早く収穫したいという気持ちが強くなってきました。でも、自然のサイクルには逆らえないことも知っています。焦っても収穫の時期は早まらないし、むしろ急ぐことで植物にダメージを与えてしまうかもしれません。このように、収穫を待つ時間は私にとって忍耐力を鍛える良い機会です。」

「毎回畑をしていると植物の生死を目の当たりにします。水やりをして元

気に育ったと思いきや、天候や環境の変化で死んでしまうことがあります。だからこそ、ちゃんと育った時の感動は大きいと思います。」

「畠に行き、自然と触れ合っているときにチームのメンバーと「ウェルビーアイジングを感じると自然を感じるのは似ている」という発見がありました。」

「1学期を通して感じっぱなしではなく振り返ることで感性を磨くことが出来たと思う。土・いのち・太陽・水に加え土地を貸してくださった地主さんや園芸店に感謝をして食べたら枝豆の一粒一粒が重みのあるようなものに感じた。」

「グループの数だけ違う野菜が育ち、ここに居る人の数だけそれらの感じ方が違う。自分と同じ人は居ないし、理解できない部分があって当然、これも、他の授業と通じるものだと思えました。」

「私が感じたのは全体でのつながりである。水やりを全体として行ったり、畠作業の経験のある人に頼ったり、みんなが他のチームの野菜や畠を褒め合うなど。その環境は学部全体の雰囲気や人柄を感じさせる場であるとともに、自然を通して同じ何かを感じてこられたからだと思う。」

「正直最初は感じるということに対して難しいと感じたりしていたが、少しずつ感じることができるようになった。そして私的にはそれにプラスでさまざまなことに問い合わせ持てるようになった。その問い合わせに対し自分なりに考えて答えを出し、調べてみたり人に聞いたりなどして学ぶことができた。これはこれから的人生に大きく活かせると思う。」

「この観察力は、他の生活の場面でも役立ちます。例えば、人とのコミュニケーションにおいても、相手の言葉や表情の微妙な変化に気づき、それを理解し受け入れができるようになりました。」

中には、体験や感じるというところから、自然と人間の関係についての洞察が生まれてくる学生も見受けられた。

「私は人間と植物の関係には単なる支配や従属といった上下ではなく、対等であり、自然という輪で繋がっていると考えたい。しかし、それは傲慢な考え方になってしまふかもしれない。「人間が植物との関係性をどう捉えるか」これはこれから人間がひいては地球が存続する上でとても重要なことだと思う。」

「じゃあ自然は私たちのことを必要とした瞬間があったのか。自然とともに生きるというフレーズをよく耳にするが、共にといえるほど対等なのか、私たちが供給していることはあるのか、私の中での答えは、「人間によるただの片思い」しかもかなりこじらせていて、自然側も自分のことを必要としているだろうと考えちゃっている、そう結論づけた。」

「“私たちの体は自然でできている”と思う。実際、自然がなければ生きていけないと思うし、本当のところどう人間が生まれてきたのかは確実ではないと思うけど、生まれるより前に自然は存在していて何かしらのつながりはあるかなと、」

「そう考えてみると、この地球でおこっている自然現象はすべてつながっており、どれか一つでも循環が止まってしまうと地球上の環境に影響を及ぼしてしまう。人は一人では生きていけず、常に地球上の誰かに支えあい助け合いながら生きている。私たちの日常に何気なく存在している自然、土。それは小さな存在なのかもしれないけど、どれも私たちが生きるために欠かせないものだと今回の実習を通じて改めて実感できた。」

なお、ウェルビーアイジング学科では1年生の必修授業として「建学の精神」を学ぶ授業群が設けられており、学生らは1学期には西本照真教授の「建学の精神入門A（人間観）」を受講していた。この授業で学生は武藏野大学の歩みや

仏教の人間観について等を学び考える機会を得ている。他にも1学期には前野隆司学部長の「ウェルビーイングデザイン入門A（全体像と歴史）」を受講している。さらに武蔵野大学では2021年より全学共通の必修科目としてSDGsを学ぶ授業を開設しており、ウェルビーイング学科生も授業をとおしてSDGsの考え方や目標、その背景について学んでいる。これらの授業での、いのちとは、幸せとは、持続可能な開発目標とは、ウェルビーイングとは、といった問い合わせが学生らのなかで統合され、本講義での体験がより豊かなものになっていくことが想像できる。

（3）公園での授業

野菜を育てる授業に加えて、3、6週目には大学のキャンパスに隣接する公園にて授業を実施した。この授業では、畑とはまた異なる体験によって、学生の感じる力（感性）を磨く、言い方を変えれば、学生が元々持っている感性を呼び起こすことがねらいであった。

「感じる力（感性）」は非認知的能力と深く関わるものとして注目され、学校教育における実践から、感性を客観的に測定、分析する手法の研究開発まで、多方面に発展している。UNESCOはEducation for Sustainable Development(ESD)の取り組みとして、知識の習得に偏らず、実践や行動する力、感じる力を統合した包括的な学び、いわゆるHeads, Hands, and Heartsの学びが、現代社会が直面する複雑な課題に立ち向かうには重要であると強調してきた（例.Sipos, Battisti, & Grimm, 2007; UNESCO, 2012）。その一方で、感性の豊かさや深さは、定義し評価するのが難しいという面もあるからか、感性を育む学びが十分に教育現場及び社会に浸透してはいないようにも考えられる。

筆者（山田）は、私たちは日常で片時も途切れることなく、体内の状況、周囲の気温の変化などを敏感に感じながら生きており、私たちがこのような感じる機能を止めてしまうとしたら、生活に支障をきたすばかりか生命の維持も危うくなると考えている。同時に、私たちはエアコンの効いた室内や身体がそんな機能を果たしていることを認識しないでも生きられる環境を手に入れ、そのために「感じる」ということがどこか非日常的なものとして、または「考える」ことに比べて重要度の低いものとしてみなされるようになっているようにも考

える。職場では上司から「仕事では感情的になるな」と何度も指摘され、感情を押し殺すことが一人前の社会人なのかと思ってその指導に従ってしまう。かくいう筆者（山田）もかつてはそう思い込んでいたが、次第にそれはどこか無理があると考えるようになった。人間は感情のある生き物であって、もともと備わっているものを使わずに生きるのは、植物に例えれば花を咲かせずに実だけつけろ、と言われるようなものではないか。そんなことは自然の摂理に反しているだろう。

授業でこのようなことを学生に伝え、そのうえで、感じることはそんなに必要ないという判断をするならそれは個人の選択であり尊重する。しかもし少しでも何か感じるものがあるなら、まず一度試してみよう、と呼びかけた。

3週目の授業はかなりの雨が降っていたが、授業のなかで公園を行った。

雨で濡れるのが嫌な学生もいただろうが、結果的には全員が雨の中で、武藏野キャンパス内および隣接公園の中に生えている木々の中で自分の感性にピンと来る木を見つける、という体験をした。6週目には、公園の芝生の上で、大地を感じる呼吸とともに自分が木になったと思って立ってみる、という体験を行った。可能な人は芝生の上で裸足になった。

これらの活動は、木や大地と人とのつながりを育み、感じる力を育むネイチャーゲームのなかでも代表的な活動である（コーネル, 2020）。ここまで授業で、畑で野菜を育て、お気に入りの木を見つけ、感じて言葉にするということを体験してきたからこそできる授業であった。

この授業での学生コメントも抜粋で紹介したい。

「私は大きな木に近づき、そっと尋ねました。「あなたは100歳ですか？」木はゆっくりと揺れながら答えるかのように「そんなに長くないよ～。」私は思わず笑い、続けて好奇心で「じゃあ、実際には何歳ですか？」と聞きました。」

「裸足だと草のちょっとチクチクやフサフサした感じ土のサラサラした感じなど様々な自然を感じることができる。裸足で地球のエネルギーを吸うこと強く想像しやってみた時、エネルギーが足の裏から血管を通るよう

に全身に伝わり、ほんのり身体が温かくなつたよう感じた。」

「木になって深呼吸すると、体全体で太陽の暖かさと風を感じた。太陽と風のエネルギーを根に送って、根がぐんぐん伸びていくのを感じた。4回くらいの呼吸で自分の背丈くらいの根が伸びた。根が横に伸びたとき、隣にいた友達の根と触れた。本当に自分から根が生えて地球にくつついている感覚になった。」

「馬鹿らしい感じがするけど、実際に裸足になると感じられるものがこんなにも多いと気付かされた。足から呼吸する感覚は本当に面白かった。自分が木になったときは、根っこを地面に張ると抜けない感覚になったのも面白かったし、どこにも動かずその場で何年も成長していく木の感覚を得られた感じがした。」

「すとんと足を地面につけたから地面とつながったみたいになって身体と地面がつながっているみたいな感じ。重力も感じた。木になって、自分の腕に葉っぱが沢山ついているの想像して、風を感じたとき、指先の感覚が敏感になって本当に自分が木になって風を感じているみたいだった。」

「自分の手や、腕を木の葉っぱのように見立て、風などの自然のままに感じてみるという時間では、ちっぽけな存在ではあるが、自然の中の一部として存在していることを感じられた。それは、人と自然とが別のものであるとして括って考える、現代の私たちの常識に囚われている日常からの脱却をすることのできた、唯一無二の私の空間であると感じさせられるようなものであった。」

「木の枝には人間のような関節があるわけでは無いから動くことはできないにしろ、関節以外の人間の骨よりもよっぽど頑丈なのかもしれない。骨は簡単に折れるし欠ける。木のようなちょうどいい柔軟さを持ち合わせていないことも要因のひとつかもしれない。硬いだけじゃだめなんだな、バ

ランスが大事だと思う。」

「木はいつもほんの少しひんやりしている。人間が持つような温もりはないし、硬いし動かないから包み込んでくれることもないのに、どうして木に抱かれていると思うことがあるんだろう。」

「やる前まではただの木だろうと侮っていたが、いざ木を目の前にすると巨大なものへの恐怖と安堵という矛盾した感情を抱いた。初めてその2つの感情を同時に抱き、この相反する感情が同時に発生することがあるんだと驚愕した。」

「裸足になって草の上を歩くことがこんなに解放感を感じられるなんて知らなかつた。いつも歩いているはずの地面がもっと身近に感じ、自分の足でこの地球に立っているんだという実感を得ることができた。日々私は地球の上を歩いているはずなのに普段はそんなこと意識せずただ地面が存在しているように思つてしまつていた。今回改めて私は地球の住人なのだとということを理解することができた。」

4. 授業をとおした学生の変化

これらの授業を体験して、学生にはどのような変化が起きたのかを、最終レポートから考えたい。

端的に表現するなら、感じようとしなくても感じるようになつていった、つまり先にも述べたように、日常で感じるということが当たり前のものだということを思い出した、とも言えるような気づきがあった。学生のレポートを一部抜粋し紹介する。

「物事をありのままに感じることをやめようと封印している最中だった。疲れるし、誰も求めていないし、つらい時もあるし。でも封印真っ最中にこの授業に出会つて変わつた。少しだけどありのままに子供みたいに感じることに夢中な自分がかっこよく見えた瞬間があつた。」

「授業を通して、「私は自然だ」ということが少しですが感じられた気がします。授業を受ける前と今で、確実に私自身に変化がありました。下を向いて歩く癖が、木を見上げながら歩く癖に変わったこと、風の匂いや気持ちよさを体感できるようになったことなどです。」

「今まででは、自然の中を歩いていてもほぼ何も感じていなかつたと思うし自然に興味がなかつた。けれど今は、ふとあった緑とかを見ると心が落ち着くようになった気がする。」

「自然の美しさや多様性に触れることで、感謝の気持ちが芽生え、日常の小さな喜びに気づくようになりました。自分自身の観察力や集中力が高まつたと感じています。」

「感じることについて、今までただ感じるって何？って思っていただけだったし、感じることを育てたり磨いたりするのなんて無理じゃないの？と思っていました。自然と触れて感じることを自分一人じゃなくてみんなでやつたからこそ、向き合えたし感じるのを磨くことができたかなと思います。感じる力って実はすでに持っていると思う。ただ僕は感じていることに気がついていないだけなのかもしれない。」

「この授業が始まった当初との変化は自然が体にどれだけの影響力を持つのか。最初はそんな難しいことができるのかと思っていたが、低気圧で体がだるくなるのと同じように、自然の中にいると深い呼吸ができたり、全然難しいことじゃなかつたと気づけた。」

「普段歩く道に生えている木や草花が今までより気になって、立ち止まって見たりするようになった。話すのがゆっくりになった。歩くときの目線が変わつた。今まで歩くのが好きだったが、今は木や草花を見たいから歩くのが好きになつた。」

「普段は日常の問題に振り回されてばかりで使い切れていた部分を使って新しい感覚に目覚めた気持ち。自然に関する捉え方が変わった。例えば、雨が降った時には「苗が雨を浴びている、この雨で育っていくのか」と、前までは思わないようなことを考えるようになった。」

「公園に行ったり木と呼吸したり自然を感じながら歩いたりすると、自然と「感じる力」が磨かれたと思う。野菜を見るときに実を見るだけじゃなく、葉脈や葉の裏側をみた時に自分で「視点が変わったな」と思い変化を感じられた。また、周りの自然を見ながら歩くことが好きになったので、駅から家まで徒歩で帰ることが増えた。」

「自然に触れることができて本当に考えが広がった。すべての命とつながった気がする。自分が思っていたよりも自分の可能性は、無限大だと思うことができた。」

5. まとめ

ここまで振り返って、最初に紹介したシラバスの文章と照らしてみると、「私たち人間が自然とのつながりの中で生かされているということ、地球という生態系の一員であることを心身で深く実感することです。それは身体、心、社会の Well-being を支える土台、基礎体力を養成することになります」という点については、その深さは各人で異なるものの、ウェルビーイングの土台となる人間と自然とのつながりを感じる基礎的な力はある程度ついたように評価する。ただし、そもそも自然と触れるということに前向きな姿勢を示していた学生は学科生の一部に留まっており、全員に当てはまるわけではないことを記しておく。

同時に、シラバスにある「人間という生物として本来備わっている本能的な感性を呼び戻し、様々な事象の中に目には見えないつながり合い、関連性が常に存在しており、その関係性の網の中で私たちが相互に関連しながら変化し存在していることを実感していきます。」という生態系のつながりあいを感じて自分たちの存在を捉え直す、というところについては、未達に終わっ

たと考えている。

当初の目論見への到達度は置いたとしても、学生たちと共にこの授業を作ってきて最も強く印象に残るのは、学生たちの中にある子どもの頃のような瑞々しい感性は今もしっかりと存在しているということである。それはレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」(1965=2021) の中の言葉に寄せて言うならば、少なくとも一人の自然好きな大人の手助けがあれば、みるみるうちに蘇るのだということである。その小さな変化は大きな希望につながると考える。

こうして1学期が終わり、2学期は授業自体はないが、学生たちは畠の野菜の世話をし、収穫をしていった。学生が自主的に1週間に1度は足を運び、観察し、収穫の喜びを分かちあって欲しいと思っていたが、熱心に畠に通う学生と全く行かなくなる者の違いが鮮明になった。感じるということが日常に定着し主体的に学ぶ力を育むことの難しさも改めて感じさせられた。

また、梅雨以降の野菜の成長スピードは想像以上に早く、他の班の畠に侵入するカボチャやカラスに食べごろを狙われたスイカなど、学生の手に余る状況が発生した。そのことで、せっかく大事な土地をお貸しいただけた地主さんの信頼を損ねることも一時起きてしまい、大いに反省するところとなってしまった。

世界初のウェルビーイング学部で新しい授業を学生とともに作る体験は、手応えとともに、自然を相手にする授業ゆえに教職員の想像を超えた状況も起きた。また、一部の学生からは「こんな授業にどんな意味があるのか?」「もっと知識が身につくものがいい」といった率直な声もあり、今後に向けてはウェルビーイングと自然を感じることの関係について、体験を糸口にしてより深く考える授業に進化していく必要を感じた。

2年目以降は、どのような特性や価値観、経験をもつ学生が、本授業を受けた時に、どのような面での変化が生じるか、その変化は持続的なものであるか、といったことを、量的、質的な評価手法なども活用して観察、分析、考察していきたいと考えている。

自然・環境の学びは2年次も継続して授業が設定されている。今後も学生たちの感じる力の深化が、自然とのつながりの上に成り立つウェルビーイングな社会の創造につながることを信じて、共に体験しながら試行錯誤を続けていくこ

うと考えている。

注釈

- 1 武蔵野大学ホームページ。「響学スパイラル」(https://www.musashino-u.ac.jp/basic/learning_cycle.html) (閲覧日: 2025年6月1日)
- 2 武蔵野大学の授業シラバスは以下より検索、閲覧可能である
(<https://muscat.musashino-u.ac.jp/portal/slbssrch.do>)

引用文献

- カーソン, レイチェル (1965=2021) 『センス・オブ・ワンダー』(上遠恵子訳)
新潮社.
- コーネル, ジョセフ (2020) 『空と大地が私に触れた～自然のマインドフルネス』
(吉田正人訳) 日本シェアリングネイチャー協会.
- 前野隆司 (2013) 『幸せのメカニズム—実践・幸福学入門』講談社.
- 前野隆司 (2024) 「仏教的ウェルビーイング学と科学的ウェルビーイング学の
響創の可能性」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』7, 1-24.
- Sipos, Y., Battisti, B., & Grimm, K. (2008) "Achieving transformative
sustainability learning: engaging heads, hands and heart". International
Journal of Sustainability in Higher Education, 9(1), 68-86.
- UNESCO(2012). "Shaping the education of tomorrow: 2012 report on the UN
decade of education for sustainable development". Paris.
- 山田博 (2018) 『森のように生きる—森に身をゆだね、感じる力を取り戻す』
ナチュラルスピリット社 .